
「12月の雨」

巳苦 昌介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「12月の雨」

【Nコード】

N1657Z

【作者名】

巳苦 昌介

【あらすじ】

タイトルの意味は、不完全なもの、という意味です。

12月は、主に雪が降ります。したがって、12月の雨は、雪のなりそこないです。

そんなかつこいいフレーズを思いついたので、作ってみました。

私は今、恋をしている。彼を見ていると、胸がドキドキして、他の子としゃべっているのを見ると、胸がキューッと痛くなる。典型的だけど、普通の恋。私は中学生で、彼は最近入って来た新人の塾講師ってところが、ちょっと特別な。彼が学校の先生でなくてよかった、時々思う。それは彼にとっては不本意な評価かもしれないけど、学校の先生よりも、塾の先生の方が、幾分ハードルが低い気がする。当の先生は、私がそんな思いで見つめているなんて、思いもよらないだろう。

私は、思い切って告白するつもりだ。受験で忙しくなる前に、というのもあるけど、なんとなく先生は3学期まで、塾にはいない、ような気がする。授業中は見せないけど、授業前や終わった後に、たまに見せる表情。仕事が楽しい人のそれではない、と感じる。

ただ、私には懸案事項がある。それは、先生に彼女がいるかどうか、だ。他の先生に聞いてもわからないし、当然、当の本人が教えてくれるわけでもない。

しかし、クリスマスにはわかる。イブも当日も塾なのだから、彼女がいるなら、どちらか確実におしゃれをしてくるはずだ。先生たちはスーツだけど、その前の私服か、スーツ自体がいつもと違うことは、私なら一瞬でわかる。そして、もし彼女がいらないなら、その日に告白するのだ。名付けて、クリスマス大作戦！

クリスマス当日

「おー、今日はクリスマスだなあ。みんな、見たらわかると思うが、俺は今日おしゃれしている。だから早く帰りたい。でも、今からするテストが、全員合格じゃないと帰れないから、みんな頼んだぞ」

最悪だった。確定ではないにしろ、ほぼカミングアウト。まじシヨック。クリスマスシヨック。

今日の先生は本当に素敵だった。細身のスーツに、細すぎない身体がマッチしている。髪型もいつもと違い、今日は普通の若者のようだ。しゃべるしぐさが、ペンを持つ手がカッコイイ！

しかし、意外な展開が起きた。先生が用意したテストは難しかった。難関私立入試レベルの問題が最後にあり、ほとんどが居残りとなっていた。それから、20分、50分、一時間30分経ち、11時になってから、ようやく先生が許してくれた。

「先生、彼女怒ってるんじゃない？」

男子はニヤニヤしている。しかし、いい指摘だ。是非そうであってほしい。

「怒らないし、たぶんダイジョブだよ」

男子は、あーあ、とか、かわいそー、とかいつている。

「先生、さようならー」

「おう、さよならー！ 氣いつけて帰れよ」

ここで待ち伏せ。こうなったら後をつけて、彼女を見てやる。そして、別れそうだったら、うれしいな。

「お疲れ様です。お先に失礼します」

「おつかれー」

先生が出てきた。トレンチコートが似合っている。彼女は、いったいどんな人なんだろう？

先生がコンビニに入った。レジに出したのは、ケーキとシャンパンか、ワインか、とにかく大人の飲み物だ。これだけ待たされた上に、コンビニケーキですまそうなんて、私はいいいけど、彼女は激怒するかもしれない。期待が高まって来た！ イエーイ、メリークリスマスー！！

先生は歩いている。とつくに辺りに人気はない。もう30分は歩

きつぱなしだから、そろそろ山にぶち当たるかもしれない。彼女は、なんでこんなところで待っているんだろうか？もし、彼女が車で来てたら、私はどうやって家に帰ろうか…。

先生が、くるつと曲がった。急いで後を追いかける。

「ここって…」

霊園

「メリークリスマス」

妻は、出産のときに死んだ。息子も、助からなかった。そのあと、自暴自棄になって、教師を辞めた。

「やっぱり俺、子どもが好きだよ、さおり」

学生結婚で、両親には相当反対されたが、幸せで順調な日々だった。卒業間際に子どもができて、俺が働いているときに、妻は切迫早産で救急車に乗った。俺が病院に着いたとき、もう妻の意識は無く、医師の心臓マッサージと、その横に白いガーゼで覆われた息子を、ただ見ていることしかできなかった。

「今年は、ホワイトクリスマスにはならなかったけど、お前と栄太のケーキは買ってきたから。二人で食べよ。あと、シャンパンも買って来たぞ、さおりはアルコールこれしかダメだからな、あ、栄太には飲ませちゃダメだぞ」

繁栄と、太い命と信念を持ってほしいという意味でつけた、栄太。この世に生まれることは、なかったけれど、おれはお前が俺とさおりの間にできて、うれしかったんだ。

「そつえば、塾にさおりって名前の子がいるんだ。どっかお前に似て…るよ」

温かい涙が、外気に触れて冷たかった。

「うっ」

いけない！バレてしまう。でも、涙が。先生って、奥さんと子どもを……。わたし、最低だ。なにが、クリスマスだ。クリスマスなんてなくなればいいのに。

二人の嗚咽が、静かな霊園に響いていた。空から、ポツリと、雨粒がさおりの頬に落ちる。

「きや」

あまりの冷たさに、さおりはつい声を出してしまった。

そのすぐ後、二人は同時に今年最初の雪を見た。

（後書き）

最後まで読んでいただけて光栄です。ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1657z/>

「12月の雨」

2011年12月5日23時04分発行